

## コレクション紹介 大森文庫の価値について

—華岡流医術の真髄とその地方伝播の実態を解明する鍵—

島根大学特任教授 梶谷光弘

### 1 はじめに

安来十神ライオンズクラブは、江戸時代から明治時代にかけて、大森泰輔・加善・六四郎が医業を行った安来市大塚町本町の大森家前に顕彰碑を建立した。そして、2008年（平成20）6月22日、大森博史氏へそれを引き渡した。さらに、7月20日、「大森家三医師生誕地碑建立実行委員会」は、安来市長島田二郎氏、島根大学副学長高安克己氏、安来市医師会会長渡部和彦氏らの来賓20人を招き、地域をあげて盛大に式典を開催した<sup>1)</sup>。

この石碑には、「大森泰輔・加善・六四郎は、華岡家にて麻沸散を用いた最新の医術を学び、ここで治療を行い多くの人命を救った。又、医塾『奇正軒』を開き、多くの医生も養成した」と記されている。

著者は、当日、来賓として招かれ、式典終了後、「出雲国に伝播した華岡流医術とその時代」という演題で講演を行った。

こうした動きの発端は、大森家に所蔵されていた大量の古医書や日記などにより、華岡流医術を学んだ大森泰輔ら親子3代が果たした業績が明らかになり、地元大塚町の有志が「郷土の文化人生誕地顕彰碑建立事業」を立ち上げ、尽力した結果であった。



写真1 大森三医師生誕地碑  
(安来市大塚町)

## 2 寄贈の経緯

大森博史氏の御尊父史郎氏は、当時、島根医科大学(現島根大学)副学長だった石原國氏と鳥取大学医学部を通じての知り合いだった縁により、1979年(昭和54)、家蔵の古医書や日記類を寄贈したい旨を伝えられた。まもなくして、史料はダンボールに詰められ、トラックで大学へ持ち込まれた。

その後、2012年(平成24)まで数回にわたって寄贈が行われた。

資料1 寄贈の経緯と大森文庫の成立<sup>2)</sup>

年号	西暦	できごと
昭和54年	1979	島根医科大学副学長石原國氏と大森史郎氏とのつながりにより、大森家より史料寄贈の申し出がある。その後、史料が大学へ持ち込まれる。
昭和63年	1988	10月 史料の受け入れが整い、医学史料コレクション大森文庫が誕生する。
平成元年	1989	「大森文庫目録」を作成する。
平成2年	1990	持ち込まれた史料のうち74冊を受け入れる。
平成13年	2001	1月 大森文庫を島根医科大学附属図書館貴重図書に指定する。
平成17年	2005	掛軸2幅、書付1点を受け入れる。
平成18年	2006	残りの477冊を受け入れる。
平成19年	2007	掛軸7幅を受け入れる。
平成21年	2009	追加として54冊を受け入れる。
平成22年	2010	追加として6冊を受け入れる。
平成24年	2012	掛軸4幅を受け入れる。

こうして、現在、島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館の大森文庫には、書籍611冊、掛軸13幅、書付1点が所蔵されている。

概観すると、これらは大森泰輔・加善・六四郎らが筆写したり買ひ求めたりした、江戸時代後期から明治時代中期に至る医学・薬物、本草、ほんぞう しんがく心学・教訓、日記、漢学・儒学、宗教など、多岐にわたるものである。その特徴は、書籍611冊のうち刊本は250冊にも満たず、自筆稿本や筆写本が全体の60%余りを占めていることである。

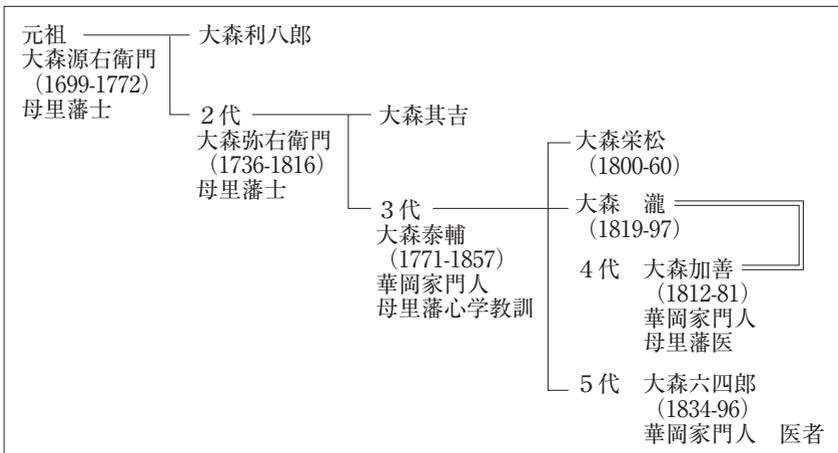
とくに、彼らが親子3代にわたって華岡家へ入門して医学修業を行ったため、華岡家医塾の実情やそこで学んだ華岡流医術の真髓が把握できる。また、彼らが修得した知識や医術を生かし、江戸時代後期から明治時代中期まで地域医療に貢献したため、麻沸湯を用いた華岡流医術の地方伝播の実態が、詳細に把握できることも注目すべき点である。

華岡青洲について長年研究され、多くの著書を出版されている弘前大学名誉教授松木明知氏は、この大森文庫を取り上げ、「華岡流医術の出雲地方への普及を知る上で貴重<sup>3)</sup>と評価した。そして、大森泰輔が「春林軒」に在塾した際に記した「南遊雑記」2冊についても、「華岡流の医術の実態、地方への普及を知る上で好個の史料」であり、「この『南遊雑記』の史料的価値は高まるもの」とし<sup>4)</sup>、今後の研究へ大きな期待を寄せた。

### 3 大森泰輔の華岡家入門

松江藩の支藩である母里藩<sup>もり</sup>において、大森家は、1800年初頭から医者として活躍し、3代泰輔、4代加善、5代六四郎が華岡家門人であった。その系図は次の通りである。

資料2 大森家の系図



### 3.1 大森泰輔について

1771年（明和8）、母里藩士の次男として生まれた大森泰輔は、小さい頃から画家を目指していたが、家庭の事情により断念し、21歳の時、母里藩へ奉公に出た。そして、江戸や大坂で学問・医学修業を行ったことをきっかけにして、28歳の時、医家を開業し、23年後の1821年（文政4）、51歳の時に「大庄屋直支配」、「名字御免」となり、医者として認められた。

幕府や藩が医者<sup>5)</sup>の身分について明確に定義しなかった江戸時代<sup>5)</sup>、この事実は、母里藩では民衆から認められて初めて「医」という職業に就くことができたことを示している。

この年、華岡青洲門人<sup>すなほ</sup>の西山砂保と出会って「瘍科瑣言<sup>ようか さげん くじゅ</sup>」を口授され、筆写した。

このできごとは彼にとって大きな刺激となり、できれば自分も華岡家で学びたいという希望をもつようになった。だが、大森家には医業を継ぐ者がおらず、また、当時の医学修業には多額の費用がかかるため、断念せざるをえなかった。

1828年（文政11）になると、大原郡の神職千原美濃<sup>ちはらみの</sup>の次男安之進（後の加善）がやってきて医学修業を行うようになった。そして、1832年（天保3）頃に



写真2 大森泰輔自画像



写真3 大森泰輔が「合水堂」で筆写した医学書  
（「陰症百問」・「青洲医談」・「膏方便覧」）

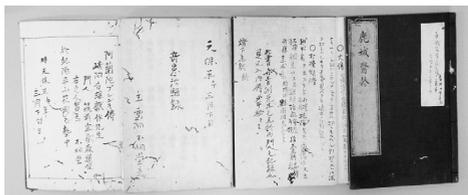


写真4 大森泰輔が「春林軒」で筆写した医学書  
（「巻木綿図彙」・「奇患治験録」・「燈下医談」・「鹿城医談」）

## 資料3 大森泰輔の年譜

年号	西暦	歳	できごと
明和8年	1771	1	藩士大森弥右衛門（高16石）の次男として誕生する。
天明4年	1784	14	画を学ぶため、安来の安田屋へ入門する。
寛政3年	1791	21	正月 父の借金が60貫文に達し、画工になることを断念する。 正月 御小人を願い出、吉村又八郎の御供で江戸へ出かける。 奉公の閑を見つけて素読、国書等の講釈、剣術などを学ぶ。
寛政6年	1794	24	5月 江戸での奉公中、尾張藩の御殿薬田中安益へ入門し、医学修業を行う。
寛政7年	1795	25	10月 葛岡多門七の御供で大坂へ上京した際、後藤栗庵、金田先生へ入門し、昼夜にわたって病家の御供をして医学修業を行う。産科は吉田意仙や賀川家で3年間修業する。
寛政10年	1798	28	帰国後、医家を開業する。
文政4年	1821	51	大庄屋直支配、名字御免となる。 西山砂保から華岡青洲の「瘍科瑣言」を口授される。
文政8年	1825	55	医師組合「医神講」の一員となる。
天保4年	1833	63	正月 医学修業のため紀州へ向けて出発する。 3月2日 大坂「合水堂」へ入門する。 6月 大坂からいったん帰国する。
天保5年	1834	64	2月19日 再び華岡家において修業するため母里を出発し、平山の「春林軒」へ行き、35人の門人と寝泊まりをともにしながら医学修業を行う。 6月 華岡青洲の肖像画を描き、青洲本人から賛をもらい、帰国する。
天保6年	1835	65	広瀬藩医から華岡流医術への批判を受ける。
天保8年	1837	67	9月25日 母里藩心学教訓となる。
天保13年	1842	72	8月5日 片江浦亀助妻の乳岩手術を執刀する。
安政4年	1857	87	4月21日 享年87歳の長寿を全うする。

は娘瀧の婿養子となり、医業を手伝うようになった。

1833年（天保4）、63歳になり、大森泰輔は医業を安之進に任せ、当時「日本無双の名医」と言われた華岡青洲の医術を学ぶため、紀州平山へ向かった。

しかし、青洲は不在であり、和歌山へも廻ってみたが、青洲は藩医として和歌山城へ登城していたため会えなかった。

そこで、泰輔は、3月2日、大坂中之島に在った「合水堂」<sup>がっすいどう</sup><sup>6)</sup>へ入門し、出雲国から15番目の門人となった。だが、すでに医者を開業して35年が経過していた泰輔にとって、「合水堂」では学ぶべき内容が乏しかったため、数ヶ月ほど滞在した後に帰国した。

翌年（1834年）、泰輔は、華岡青洲から直接医術を学ぶため、再び紀州平山に在った「春林軒」<sup>しゅんりんけん</sup>をめざして出かけた。そこには安田孝平を「塾頭」にして35人が寄宿しながら学んでおり、青洲が時々行う手術をはじめ、娘婿の華岡南洋<sup>なんよう</sup>や門人が行う診察・手術にも立ち会い、新しい医学知識や薬方、医術を修得した。

帰国する際には、自ら別の華岡青洲座像を模写し、そこへ青洲から次のような賛をもらった。

竹屋蕭然烏雀喧（竹屋蕭然烏雀喧し）  
 風光自適臥寒村（風光自適寒村に臥す）  
 唯思起死回生術（唯思う起死回生の術）  
 何望輕裘肥馬門（何ぞ望まん輕裘肥馬の門）

青洲（印）（印）

この賛は青洲の自画像にたくさん見られ、華岡家の門人としての、また医者としての心意気を示したものであった。

泰輔は、帰国すると、早速、地域医療に従事したが、広瀬藩の医者である瀧道齋から誹謗された。

しかし、彼は、「余は未熟なれども華岡の流れを用ゆ、然れば余を誹るは則ち花岡を誹る也、日本第一の花岡を誹るは其道を知らず」と、自信をもって反論した。同時に、「医術を磨くべし」と決心した。

大塚町で開業する医者でありながら、1837年（天保8）には「母里藩心学

教訓」となった泰輔は、1842年（天保13）8月5日、片江浦亀助の妻の乳岩手術を執刀した。だが、麻沸湯の効き目が弱かったせい、コロメスで切断後、「積気上心（痛み狂って）、死を欲す、諸薬無効」という状況に陥った。

泰輔は、「春林軒」で青洲の乳岩手術を実際に見、門人が筆記した乳岩手術の治験録も筆写していたが、自ら麻沸湯を調合して執刀することは、非常に難しいことであった。

一言で「華岡流医術の地方伝播」と言うが、実際は生やさしいことではなかったのである。



写真5 大森泰輔筆  
「華岡青洲肖像画」

### 3.2 「他国雑記」からみた華岡家の実情

大森泰輔が、1833年（天保4）正月に大塚を出発し、京都で漢学・心学の学問修業、大坂中之島の「合水堂」で医学修業した際の日記が「他国雑記」1冊である。

これを見ると、華岡家の医学修業における基本的な考え方と、長男雲平の死去により華岡家が混乱状態に陥っていた内情が判明する。

#### 3.2.1 華岡家の基本は漢蘭折衷医学

大森泰輔は、1833年（天保4）2月19日、大坂日本橋を出発し、平山街道に入ったが、そこは「至極辺鄙にて、常に往来稀にして……道のりしかと定まらず、知る人なし」という寂しいものであった。平山から和歌山へも廻ったが青洲に会えなかったため、再び大坂に戻り、3月2日、大坂の商人「橋本屋治助」を「請人」（身元保証人）とし、華岡家分塾である「合水堂」へ入門した<sup>7)</sup>。

在塾中、泰輔はたくさんの書名を記録した。

それを見ると、「金瘡口訣」、「青洲医談」、「天刑秘録」、「瘍科方箋」、「膏

方便覧」など華岡青洲に関わる医書は当然だが、産科医の奥劣斎の「達生園方轂」、貝原益軒の「大和本草」、小野蘭山の嗣子である蕙叡の著「飲膳摘要」、中国の書物である「外科正宗」、「本草備要」、福井楓亭の「集驗良方」、「方説弁解」、さらには池田冬蔵の「解臟図譜」、杉田玄白の「解体新書」、宇田川榛斎の「(和蘭内景) 医範提綱」の解剖書などを書き留めており、華岡家では医学を幅広く学ばせようとしていたことがわかる。

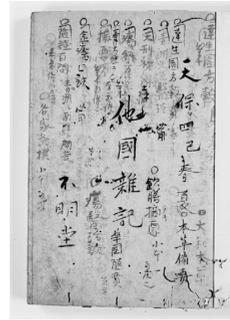


写真6  
「他国雑記」内題

また、処方も「上杉某方」、「吉益流方」、「浪華林一鳥伝」、「浪華洪川氏各方」、「求古館一方」など、幅広く取り入れていた。

そうした中で、「花岡家治之極秘伝」や「解毒剤中の大黃の分量」などを細かく記録した他、二宮彦可の「正骨範」を抜き書きして「整骨麻薬」を学んだり、マンダラゲを取り扱う薬種屋、「マンダラゲの毒を去る方」、瘤切様に用いる天南星など、麻酔薬に関する情報もしっかり収集した。

このように、華岡家の基本的なスタンスは、まず漢蘭折衷医学を幅広く学ぶことだったのである。

### 3.2.2 華岡（石堂）鼎が華岡家の中心人物

「合水堂」へ入門した直後、大森泰輔は「紀州平山若旦那 御死去、大坂花岡鼎先生追善」というできごとを知った。

これは、前年（1832年）8月に亡くなった青洲の長男雲平の一周忌が行われ、青洲に代わって華岡（石堂）鼎が執り行ったという記事である。青洲の妻加恵の妹婿となった華岡鼎が、当時74歳になっていた青洲に代わって華岡家を取り仕切ったのである。当時、彼は「先生」と呼ばれ、青洲に次ぐ人物と見なされていたのである。

青洲の実弟鹿城（1827年）、妻加恵（1829年）、そして長男雲平（1832年）が相次いで亡くなり、そのうえ青洲も74歳という高齢になったが、次男修平はまだ26歳で、医者としては未熟だったため、華岡家は危機的な状況に陥っていた。

そうした中で、青洲は、鹿城、雲平ら「華岡家血族」による医塾経営を断

念し、華岡鼎に娘婿の華岡南洋（奥準平）を加え、「華岡家一族」による医塾経営を進めており、その中心人物が華岡鼎だったのである<sup>8)</sup>。

そのため、「合水堂」は、当初、青洲の実弟鹿城が1811年（文化8）に開塾し、経営していたが、鹿城が亡くなると、華岡鼎が「知事」として関わっていた。しかし、加恵が亡くなると、華岡鼎は「合水堂」だけでなく、華岡家全体の経営にも関わるようになったため、そこは華岡南洋が時々やってきて指導した。

その結果、1827年から1832年まで6年間の「合水堂」への入門者は、わずか7人ほどであった<sup>9)</sup>。

つまり、大森泰輔が「合水堂」へ入門した頃は華岡家の内部が混乱しており、「合水堂」の経営どころではなく、華岡家本塾である「春林軒」の経営・維持がやっとだったのである。

### 3.2.3 青洲の実弟治兵衛の実像

入門して1ヶ月が経過した1833年（天保4）4月27日、大森泰輔は「華岡之知事 青木覚平公死去、中之島越前御屋鋪隣、右の人は紀州青洲先生御舎弟」というできごとを知った。

この没年から考えると、「青木覚平」という人物は、「紀州妙寺町丁ノ町」に住んで木綿問屋「富田屋」を営み、主に「大坂安土町一丁目」に立地する木綿問屋「丹波屋」と取引を行っていた、青洲の実弟「華岡治兵衛（初代）」であろう<sup>10)</sup>。

ここで注目したいことは、鹿城が没した後、「合水堂」は華岡鼎が「知事」として経営していたが、華岡鼎も華岡家全体を動かす立場になり、「合水堂」の経営が手薄になったため、商人だった治兵衛が「中之島越前御屋鋪隣」に住んで「合水堂之知事」になっていたことである。

華岡家の医塾は「血族」、もしそれができなければ「一族」で維持したいという青洲の強い思いが、商人だった治兵衛を「合水堂」の「知事」に据えるという妙案を生み出していたのである。これは華岡家存亡の危機の中、苦肉の策であった。

一方、これまで大坂中之島に「合水堂」が開塾された理由は、「入門者を安定的に増やすため」、「地理的利便さ」のある大坂を選んだとされている<sup>11)</sup>が、この事実をみると、華岡家と中之島は、華岡治兵衛の商売上の関係から

早くから強いつながりがあったことが、最大の理由とも考えられる。

その後、1841年（天保12）12月26日に入門した「西山治祐」、1854年（嘉永7）6月21日に入門した「谷川周貞」、1857年（安政4）10月2日に入門した「藤岡主計」らの「更（請）人」となった「富田屋五兵衛」、「富田屋久兵衛」、「富田屋治衛」らは<sup>12)</sup>、いずれも「富田屋」の華岡治兵衛の一族と考えられる。

こうした事実から、治兵衛が「華岡之知事」になった時期は、華岡鼎が青洲の片腕となって華岡家全体を指揮・運営するようになり、「合水堂」を不在にするようになってからであった。これを契機に治兵衛一族である「富田屋」が華岡家の医塾経営に関わるようになったものと推測される。

このように、「他国雑記」を解説すると、「合水堂」の経営が混乱し、窮地に陥っていたことが判明するのである。そして、まもなく青洲本人の死去（1835年）によって、華岡家は最大の危機を迎えるのである。

### 3.3 「南遊雑記」からみた華岡流医術の真髄

大森泰輔は、大坂中之島の「合水堂」で修業した後、一旦帰国し、翌年（1834年）2月19日、今度は平山の「春林軒」へ入門し、約3ヶ月半、ここで学んだ。この時の在塾日記が「南遊雑記天」、「南遊雑記地」の2冊である。

「他国雑記」の目次が15項目だったのに比べ、「南遊雑記天」は45項目、「南遊雑記地」は41項目に及び、わずか3ヶ月半ほどの在塾だったが、泰輔は華岡流医術の真髄を学び、充実した医学修業だったことがうかがえる。

華岡青洲は高齢だったが、生死に関わる乳岩をはじめ、脱疽、会陰打撲、



写真7 「南遊雑記天」・「南遊雑記地」目次

翻花瘡ほんかそうなどの手術を執刀し、完成の域に達していた医術を門人へ公開した。

泰輔は、華岡流医術の真髄である乳岩手術に関して、門人から教わった情報も細かく記録した。

### 3.3.1 乳岩手術

#### (1) 手術の執刀数

「春林軒」にやってきて1ヶ月ほどした頃、泰輔は、「天保四巳年迄に先生（の）家、凡（そ）乳岩の療治二百五十余人と言（う）、尤（も）死する者数を知らず」という話を聞いた。これは、「乳巖姓名録」に記載された1831年（天保2）までの150人<sup>13)</sup>を大きく上回っていた。この100人にも及ぶ誤差は、「乳巖姓名録」にはすべての症例が記載されていないことや、術後に死亡した患者が数多くいたことなどによるものであろう。

また、塾頭であった「美濃安田孝平子曰（く）、余が父は乳岩を十三人療す、其内三人は十日、三十日の中ちに死（に）、其余（り）は四、五年の午ちに死（に）、其内四、五人は今も存命せり」という話も聞き、華岡家の門人が全国各地で乳岩手術を執刀し、成功を収めていたことを知った。

#### (2) 「問診」のポイント

泰輔は、「問診」の際、「乳岩は兎角肩背へ（の）こるを目当」とし、痛みを生じている場合には、「乳岩は二十日、三十日には痛み出さず、少くても半年、一年或は二年、三年もしてから痛（み）を發する」と聞き、乳岩がかなり進行していることを知っていた。

#### (3) 「切診（触診）」のポイント

乳岩と乳核の見分け方は難しく、前者は、「手にてよくよく押（し）て見るに、何となく手ざわり角と立ちて覚ゆ、而（して）美しく丸みなき也、又堅さも甚（だ）し、消長は岩にもある」とし、後者は、「岩の如く角立たず、美しく丸みありて岩の如く堅からず」とし、泰輔は乳房を手で押してみることによって、両者を区別した。

#### (4) 手術の判断

診断した後、手術を実施するか否かについて、「乳岩自潰する迄待てば是非死する也、自潰後十日許（り）にて多（く）死す、故に自潰を待たず切断すれば百人に五十人は治す」、また「乳岩は脇下こるものは不治、又小なり

と雖（も）骨に付き深きものも不治」と教わった。

これは、腋窩<sup>えきか</sup>リンパ節への転移や胸骨<sup>きょうこつ</sup>に浸潤した場合は予後不良であるとする、現在と同じ診断であった。

#### (5) 手術の承諾書

「乳岩等難症を療するには勿論、証文を取（り）て切断すべき也」と書き留め、事前に必ずインフォームド・コンセント（informed consent）により証文を書かせ、術後のトラブルを回避していたことがわかる。

つまり、乳岩手術のような生死に関わる手術の実施は、家族等からの苦情・訴訟が生じていたことを示すもので、医療訴訟の始まりでもあったのである。

#### (6) 乳岩手術

1834年（天保5）3月下旬になり、泰輔は乳岩手術について、次のように記述している。

勢州の一婦年三十余、乳岩にて老先生是を切断す、其岩堅まらず、数々々して之（を）取（り）、下に付（く）処を切取（り）し也、血の出ること瀧の如（し）、止血の術にても止まらず、其俣縫ひ巻木綿し、一夜置（い）て血止（ま）る、全快す。

この「老先生」とは75歳の青洲である。

ところが、「乳巖姓名録」を見ると、1834年中に乳岩手術は一度も行われていない<sup>14)</sup>。

この記述は、「天保四年三月廿五日、勢州津在田中、本光寺 内室」、または「同年（天保4）四月三日、同国久井 善八 妻（三十九歳）」とも考えられるが、この2人の治験録は、別府加膳が「華家治験」としてまとめ、「南遊雑記地」にも記載されている。これを見ると、前者は「年四十有余」であり、両人とも「数旬を経て……全治」しており、泰輔が記載した症例とは状況が異なっている。

したがって、青洲は亡くなる1年前にも乳岩手術を執刀したが、その症例は「乳巖姓名録」には記載されなかったのである。

#### (7) 術後

泰輔は、術後の処置について、「乳岩を切断して当座に死せずして後に死

するは、多くは破傷風となりし也、此症破傷風となりては助かるものなし」とし、感染症を「破傷風」と称し、恐れていた。

また、「乳岩之薬」である麻沸湯を用いて「麻薬をかけ」、「二日も醒めず、其俣死するものあり、故によりより病人を（の）虚実を見ること肝要なり、麻薬後は三黄湯にてよく醒むる也、必ず用（いる）べし」とし、麻沸湯の効き過ぎにも注意を払っていた。

### 3.3.2 乳岩・外科手術を支えた華岡家の薬方

華岡流医術の真髄は、乳岩手術の際に使用する麻沸湯や手技はもちろんだが、それを支えたのは華岡家のきめ細かな診断とそれに対応した薬方であった。

華岡青洲は、麻沸湯を投与する前には「前三診」、投与後には「後三診」と言われる診察基準を設け<sup>15)</sup>、そこで見られた症状には、薬方によりきめ細かに対応していた。



写真8 「金瘡口訣」

写真9 「華岡家天保巳配剤記之写」

大森泰輔らの門人は、春夏秋冬に行う「摘薬」(薬草採集)や、植物のスケッチを日課としながら、「金瘡口訣」、「春林軒薬加減之方」、「花岡家天保巳配剤記」などを筆写し、処方への細かな違いを知った。そして、青洲らの臨床現場に立ち会うことにより診察眼を養い、薬方の実際を理解した。

これらを見ると、華岡家の薬方は、古代の『出雲国風土記』に使用されていた植物(和方)、中国の本草学から学んだ植物(漢方)、そしてカタカナで書かれた「蘭薬」・「蘭油」(蘭方)を組み合わせ、患者の微妙な症状に対応していたのである。

### 3.3.3 シーボルトと華岡家の乳岩手術

1834年（天保5）5月上旬、大森泰輔は、在塾した筑前太宰府出身の小嶋玄斎から次のような話を聞いた。

ヲルイス国のシイボルトは久々入牢せしが御免ありて三年以前帰国す。ヲルイス国は乱世にて七ヶ年が間金瘡の療治をせし故、金瘡の治術に妙を得たるもの也と。又日本にて華岡家の乳岩の治術を受（け）、長崎にて是を療じたれども死したり。

1823年（文政6）に來日したオランダ商館医シーボルト（Ph.Fr.Von Siebold）は、翌年（1824年）から通詞の家で診療を開始し、この年から長崎郊外に「鳴滝塾」を開き、門人へ実地診療や臨床講義を行い、わが国の医学に大きな影響を及ぼした人物である。だが、帰国する際、シーボルト事件が起り、高橋景保ら多くの人物が処分されたことでもよく知られている。

このシーボルトが華岡家の乳岩手術を教わり、長崎で執刀したが、失敗したと言うのである。

シーボルトに乳岩手術を教えた人物として、大森泰輔が教えを受けた西山砂保が考えられる。

西山砂保は、1811年（文化8）に「春林軒」に入門した。帰国後、麻沸散を用いて乳岩や外科手術を行っていたが、シーボルトが來日したことを聞くと、1825年（文政8）、長崎の湊長安<sup>みなとちやうあん</sup>を訪ね、翌年（1826年）4月18日、シーボルトから修了証書を授与された人物である。

日本人の医者に尊敬されたオランダ医のシーボルトが華岡流医術に関心をもち、その医術を習得しようとし、実際に乳岩手術を行っていたことは、注目すべきことである。そして、彼が失敗したことから、華岡家の乳岩手術がいかに難しく、その修得が容易なことではなかったことを示している。

## 4 華岡家塾頭大森加善の医術と地域での貢献

### 4.1 「合水堂」の塾頭として活躍

大森加善（幼名安之進）は、1812年（文化9）、大原郡清田村の神官千原美濃の次男として生まれ、17歳の時から大森泰輔に入門して医学を学び、21

歳の頃、泰輔の娘瀧の婿養子となった。

加善は、義父の帰国と入れ替わるように、1835年（天保6）正月29日、大坂の「合水堂」へ入門した。彼もまた「請人」（身元引受人）は義父同様「橋

#### 資料4 大森加善の年譜

年号	西暦	歳	できごと
文化9年	1812	1	2月25日 大原郡清田村の神官千原美濃の次男として誕生する。
文政11年	1828	17	大森泰輔のところで医学修業を行う。
天保3年	1832	21	この頃、大森瀧の婿養子となる。
天保6年	1835	24	正月29日 大坂「合水堂」へ入門する。 10月2日 華岡青洲が享年76歳で亡くなる。
天保7年	1836	25	3月3日 大坂「合水堂」の「張替役」となる。 5月1日 華岡鼎から大坂「合水堂」の「塾頭」を命ぜられる。
天保9年	1838	27	閏4月2日 大坂から帰国する。 9月 大坂の吉益掃部へ入門する。
天保10年	1839	28	6月 大坂での修業を終えて帰国し、大塚村で開業する。
天保11年	1840	29	12月24日 町医上座、御従士目付御支配となる。
弘化2年	1845	34	7月5日 御医師並寺社奉行支配となる。
嘉永元年	1848	37	4月5日 御従士上席御医師方同席、御郡代支配となる。
嘉永6年	1853	42	正月28日 医学塾「奇正軒」に能義郡赤江村野内春英が入門する。
安政7年	1860	49	御医師筆頭となる。
文久3年	1863	52	3月11日 島根郡卯井村伝助の娘の陰瘤手術を行う。 3月21日 隠州島後周吉郡矢尾村又四郎の妻の乳岩手術を行う。
慶応元年	1865	54	4月7日 藩主の御帰府に際し、御供、格式士列格勤番を命ぜられる。 この年、「奇正軒塾則」を定める。
明治2年	1869	58	3月 医師頭取となる。
明治8年	1875	64	隠居する。
明治14年	1881	70	11月13日 大塚村関田山で没する。元広瀬藩儒の山村良行が墓碑を記す。

本屋治助」であり<sup>16)</sup>、出雲国から16番目の門人となった。

同年10月、青洲が76歳で亡くなり、華岡家は最大の危機を迎えたが、加善は、1836年（天保7）3月に「張替役」、5月には「塾頭」に任命された。当時、華岡家全体を運営していた華岡（石堂）鼎は、「治療宜敷（き）様、一入頼（み）入（り）候」と書き、彼の医術に強い期待を込めたのである。

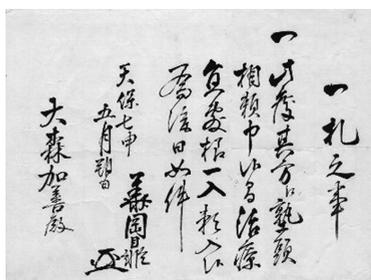


写真10 大森加善への塾頭任命書

「合水堂」への入門者は、華岡鹿城の没後（1827年）低迷していたが、1836年には10人となり、医塾経営が次第に安定してきた<sup>17)</sup>。

彼は塾頭として「乳岩再発」、「両欠唇<sup>けっしん</sup>」など多くの手術を執刀し、そこで行った20症例を「奇患並大患<sup>きかんならびにたいかんず</sup>」として記録した。

これらはまさに華岡流医術の伝統を受け継ぐものであった。

こうして、外科手術に優れていた大森加善は、華岡家の分塾「合水堂」の塾頭、その後は母里藩の御医師筆頭にまで昇進し、活躍したのである。

## 4.2 華岡流医術の真髓「麻沸湯の威力」とその地方伝播

大森加善は、1845年（弘化2）、母里藩医に抜擢され、以後、明治を迎えるまでその役職にあった。

その間、自宅で医学塾「奇正軒<sup>きせいけん</sup>」を開き、1853年（嘉永6）に最初の門人を受け入れ、1875年（明治8）に隠居した後は甥の六四郎（5代）に任せた。そして、「奇正軒」は、1898年（明治31）に最後の門人を受け入れ、約40年間にわたって華岡流医術を伝授した。

一方、加善は、1863年（文久3）3月、17歳の時に梅毒を煩い、陰瘤<sup>いんりゅう</sup>（陰部にできた肉瘤）が生じていた雲州島根郡卯井村の25歳のお多美を診察した。その時、彼は次のように述べた。

余、之れを見て言（っ）て曰く、麻沸湯を用（い）て截断せば治すべしと、患婦悦（び）て治を請ふ。

そして、3月11日朝、加善は麻沸湯を用いて執刀した。脈管を7ヶ所切断したため、出血がおびただしかったが、右の創口を12針、左の創口を9針ほど縫い合わせ、完治させた。

さらに、その10日後の3月21日には、乳岩患者を執刀した。

患者は、隠州島後周吉郡西郷矢尾村から、農夫又四郎とともにやってきた妻お冬、年齢は50歳であった。5年前から自覚症状があり、今年の正月からは疼くような痛みがあり、歩くと脈拍が早くなるという状態であった。診察した医者は、皆「不治の病」と診断した。

初めてお冬を診察した3月13日、加善は、次のように説明した。

余、一診して曰く、麻沸湯を用（い）て截断せば治すべしと。患婦又た之れを怖れて曰く、若し麻沸湯を用（い）て後、瞑眩醒（め）ず、遂に黄泉の客とならば則ち之れを如何せんや。余曰く、死生皆な天の命ずる所にして、而して医は司命の官にあらず、只々手術を施し、薬名を投じ、以て其の病苦を助くるのみ、しかるといえども、余、未だ嘗て麻沸湯を用ひて以て人を誤らず、汝ぢ、之れを怪しむことなかれ。又四郎、叩頭して曰く、手を束ねて而して死を待つよりは、寧ろ人力を尽くして以て天命を待たん、請ふ、君、治を辞すること勿れと。

加善は、又四郎と妻お冬へ丁寧にインフォームド・コンセントを行い、手術に対する同意を得ている。

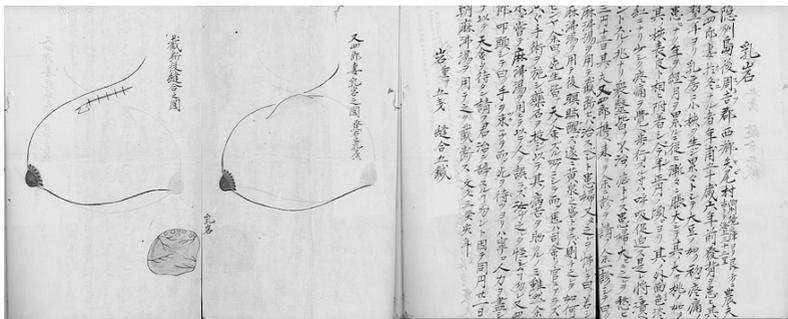


写真11 大森加善が行った「乳岩」手術（「奇患並大患因」）

その中で、加善は、これまで麻沸湯を用いた手術での失敗が一度もないことを説明した。この自信は、麻沸湯の威力とそれに関わる安全性への配慮、手術前後の薬方など、華岡流医術への絶対的な信頼と手応えからくるものであった。

その後、加善は前三診を行った後、3月21日、麻沸湯を用いて乳岩を執刀し、完治させた。

こうして、麻沸湯を用いて手術をすれば治癒することが証明され、人々の華岡流医術への信頼は一層高まっていった。同時に、病人が死を待つ時代は終わりを告げ、医者にかかれれば治癒できるという意識が芽生えたのである。

## 5 おわりに

華岡青洲が初めて乳岩手術に成功したのは1804年（文化元）のことであり、出雲地方において、死を待つしかなかった病が、麻沸湯を用いた華岡流の医術により完治することが証明されたのは1863年（文久3）のことであった。この約60年の年月をかけて、華岡流医術は出雲地方へ定着したのである。

そして、民衆の中に芽生えた医療への信頼は、その後の近代医学を受け入れる素地になっていったのである。

## 謝辞

大森文庫に関わる史料の閲覧について、島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館の皆様にはたいへん便宜を図っていただきました。紙面を借りてお礼を申し上げます。

## 注

大森文庫の史料は所蔵を明記しない。また、これまでに公表した次の拙稿については、文献として明記しない。

- ・拙稿「母里藩医学史 華岡家門人大森家の史料目録—3代目不明堂三楽・4代目三益・5代目六郎の関係史料—」、『山陰史談』30号、2000年。
- ・拙稿「母里藩の医者大森不明堂三楽の生涯—出雲国への華岡流医術の伝播—」、『山陰史談』31号、2003年。
- ・リーフレット「島根にもたらされた華岡流医術—大森文庫からみた江戸後期の診療—」、島根大学附属図書館医学分館、2005年。
- ・リーフレット「在村医の画人的素養—大森不明堂三楽が描いた掛軸とスケッチ—」、島根大学附属図書館医学分館、2006年。

- ・パンフレット「出雲国に伝播した華岡流医術とその時代—大森泰輔・加善の医術と文化的素養—」、島根大学附属図書館・島根県立図書館・松江市立図書館主催企画展示、島根県立図書館、2008年。
- ・島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編『華岡流医術の世界—華岡青洲とその門人たちの軌跡—』、ワン・ライン、2008年。

## 文献

- (1) 「大塚交流センターだより」No.24、2008年11月。  
拙稿「母里藩の医家・大森家」、『図説 松江・安来の歴史』p.154-5、郷土出版社、2012年。
- (2) 島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館所蔵文書。
- (3) 松木明知『華岡青洲研究の新展開』p.16、真興交易医書出版部、2013年。
- (4) 文献 (3) p.23。
- (5) 海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学—』p.5、吉川弘文館、2014年。
- (6) 「ごうすいどう」と読まれることが多いが、華岡鹿城末裔の方々は「がっすいどう」と読まれる。
- (7) 入門年次順門人録「四海門□□」華岡青洲末裔所蔵。
- (8) (9) 拙稿「華岡青洲門人石堂鼎と妹背家—華岡家を支え続けた功労者—」p.43-46、『日本医史学雑誌』60 (1)、2014年。
- (10) ①呉秀三『華岡青洲先生及其外科』p.105、大空社、1994年。  
②高橋克伸「春林軒『門人録』について」p.470、『国立歴史民俗博物館研究報告』第116集、2004年。  
③松木明知「華岡青洲の系譜的研究」によると、治兵衛は、1833年（天保4）4月7日に没したとされている。（松木明知『華岡青洲の新研究』p.73、岩波出版サービスセンター、2002年。）
- (11) 文献 (10) ②p.473。
- (12) 文献 (7)。
- (13) 「乳巖治験録」に書かれている最初の3人は手術を受けていない。（松木明知『日本における麻酔科学の受容と発展』p.77、真興交易医書出版部、2011年。）
- (14) 松木明知『華岡青洲と「乳巖治験録」』p.106-46、岩波出版サービスセンター、2004年。
- (15) 医聖華岡青洲展実行委員会編『ロマンと創造への曼荼羅華 医聖華岡青洲展』p.17、医聖華岡青洲展実行委員会、1992年。
- (16) 文献 (7)。
- (17) 文献 (8) p.43。

積思画妙策功明新入  
每七言定是義理堂以煎  
因尋二知海流推枝於  
仁壽ノ少日方東林作其  
經古拙焉

粹書鑑題



西山砂保肖像画  
松村氏藏



大森泰輔自画像



華岡青洲肖像画（大森泰輔筆）

いずれも島根大学医学図書館（大森文庫）所蔵